



ロシア：「対極」の世界から (7) 最終回 ～ 未知の世界開拓の一年半 ～

ロシア連邦・サンクトペテルブルグ国立大学留学中
服部 祐也

企業のロシア語研修生として当地ロシア・サンクトペテルブルクに派遣され、その任期である一年半が終わろうとしています。今回は、この18カ月のロシア滞在で私が得たことにつきご紹介させていただきます。

私にとってこのロシア留学とは何だったのか。ここで自分は何をやったのか。

長い間自問し、出た結論は、「今まで知らなかった世界をこじ開けることが出来た」ということです。具体的には、当地での生活を通して新しい分野に興味を持ち知ったこと、それから、旧ソ連圏という世界を知り、更に興味が湧いたことが、私にとってのこのロシア留学で得た大きな成果です。

1. 新しい分野への興味

ー バレエ・クラシック音楽・美術・文学 ー

私はここサンクトペテルブルクでバレエ・クラシック音楽・美術・文学が大好きになり、更に興味が湧いてきました。

ロシアの中でもここサンクトペテルブルクは芸術の街です。世界三大美術館の内の一つであるエルミタージュ美術館、世界有数の名声を誇るバレエ・オペラ劇場であるマリインスキー劇場をはじめとした多くの芸術スポットが存在するだけでなく、チャイコフスキーをはじめとしたクラシック音楽の巨匠の多く・ドストエフスキーをはじめとした世界的な作家が多くの時間を過ごした街でもあります。この様に伝統的に芸術と縁の深い街で長い時を過ごせたことは、それまで同分野における興味に乏しかった私にとっては幸運でした。

特に興味深いのは、「ロシア人にとって文学は第二の聖書である」ということです。最近の若者は文学離れが激しいといわれてはいますが、それでも特に学のあるロシア人は自国の文学に非常に詳しいです。たとえば、詩人プーシキンの作品を、あたかも人生の道しるべ、または明かりを灯そうそくであるかの様に誦んじます。ロシア文学が、わかりにくいといわれるロシア人を理解する一つの鍵となるのかもしれませんが。ロシア文学に更に明るくなることが、今後の私の課題の一つです。

2. 旧ソ連という世界

ー もはや一様ではない方向性 ー

旧ソ連諸国を多く回り、実際にその国をこの目で見て、人々と交流し、自分なりの考察ができたことも、この研修での大きな成果です。

この記事は旅行中のアルメニアの首都エレバンにて書いていますが、私はこれまで旧ソ連諸国15カ国の内、ロシア以外に6カ国（ウクライナ、カザフスタン、グルジア、モルドバ、ベラルーシ、アルメニア）に足を運びました。前回の記事でご紹介したことで重複しますが、この経験を通し、次の三つを体感しました。即ち、「元々全く違う背景（言語・文化・宗教・人種・生活環境 [山岳民族や遊牧民族も含まれていた]）を持った人々を、ソ連が共産主義という一つのイデオロギーで約70年もの間纏めていたことは驚きに値する」ということ、「旧ソ連諸国は、ロシアや西欧諸国との地理的・政治的・経済的・文化的関係から、国によって親露路線だったり反露路線だったり、進んでいる方向性が異なっている」ということ、そして「ロシアから離れようとしている国々に於いては、旧ソ連時代に教育を受けてきた中年層以上とソ連崩壊以降に生まれた若年世代間に、決定的な『断絶』がある」ということです。旧ソ連圏は一つのまとまりとして捉えられがちですが、もはや一様ではありません。特に終わりの二つについては今後もしっかり意識し、ビジネスに役立てていくつもりです。



サンクトペテルブルク市の中心のネフスキー大通りにて。
ロシアでの一年半はこれまでとは違う、新しい世界での生活だった。

服部君の前のエッセイは、下のサイトでお読みになれます。
www.infoe.com/IMZ/WASEDA/WSD-List-1.htm